ブラックボックス　　岡本　悠

悠太は絶望した！

「バン！」

ドアは閉ざされた

母の、へその緒、は、こうして切られた

こうでもするしか、方法はなかった

なんで、窓に全部、鉄格子がかかっているんだよ

皆は、慣れた顔をしている

俺は、ふてくされた、

「母親に、出てきて話ができるまで、ここを離れない」

ドアの前に、居座った

看護師が「どきなさい」

聴かない

「どきなさい」

聴かない

すると、４人の看護師に、両手両足を掴まれて、

保護室に入れられた

そして、医者に、お尻に注射を打たれて

眠ってしまった

夜中に目が覚めた

ここはどこだ

何時なんだ

しばらくして、死のうと思った

首を極限まで自分で締めた、でも離してしまう

駄目だ、死ねない

…

朝が来るまで、凄く長かった

隙間から、食べ物と飲み物が、わずかな望みだった

数日暮らしていると歌が聴こえてくる

隣の人だ

前田亘輝の「そばにいるよ」を、ずっと歌っている

男の担当の医者の先生が、話をしてくれる、聴いてくれる

優しい感じの人だ

俺は、多少、優等生、すぐに３人部屋に移った

他に、おじいさん、が２人

ほんとうは、保護室に１人でいたかったが、刺激を与える訓練だろうか？

保護室が、待ちが混んでいるのか？

わからないが、次のステージへ

PRIDE の吉田秀彦が、ドン・フライを、腕ひしぎ逆十字固めで、破った

「えっ、フライ負けたの？」

とにかく、３人部屋の隙間からの、隣部屋の音楽の騒音がうるさかった

宇多田ヒカルに悪気はないが、ずっと、宇多田の曲が大音量で流れている

ある日は、大部屋で、柔軟体操を１人でしていたら、突然、頭を蹴られた

俺は、ドラえもんののび太のように、頭がヒヨコになった

少し痛かったが、状況を掴むと、俺は、真顔でその蹴ったおじさんを追いかけていた、そのおじさんは「勘弁してくれ～！」と言った、俺は、なんとなくその意味を掴んで、殴り返してもことだと思って、追うのをやめた、でも、大部屋には危険だから行かないことにした、そのおじさんは、その夜、薬を服用していたが、飲むと、とても、穏やかな顔をして、別人のようだった

病棟が変わった、俺が最初に連れてこられた病棟だ、同じ過ちはするわけにはいかない
当たり前だった

ある日、皆で、風呂に入っていた、ここでは、この女性をマリスミゼル風にあやかって、マナと呼ぶが、マナが身体を洗おうか？　と言ってきた、やや、年輩とはいえ女性だ、でも、なんで、こういう時、俺は、素直に「お願いします」と、言えないのだろう、「いいです！」

と言った

マナは、ある時、２人になった時、私、綾小路きみまろ、が好きなの、と言って、テレビを見ながら笑っていた

床屋の出張屋は、俺が、うじうじと、うろついて、どうしたら切ってもらえるのか？　という態度にイラついていた、非常に不愉快そうに、「邪魔だ！」と言い、それでも、俺は最後に、角刈りに切ってもらった、看護師は、「角刈りにしちゃったね」と、嫌味たっぷりに云った

看護師が患者を取り押さえた時、俺は「落ち着いてください！」と、止めに入った、看護師の手は少し緩んだが、それ以来、なぜか、俺を軽視するようになった

俺は、ドアとドアの見えない空間で、マナとセックスできないか？　と、考えていた

ある日、物凄く綺麗な、ナースがやってきた、男たちは夢中になった

ある日、その美人ナースが、男たちの爪を切っていた、俺はなぜか、その美人ナースに、「爪は、自分で切りますから！」と、聴かれてもいないのに言った、そういうところが、わからない

俺は、更に、評価が上がり、別棟２階のもっと刺激がある病棟に移った

暇だったので、プロレス雑誌を、たくさん送ってもらった、そればかり見ていたら、オジサンから、「お前は、男の裸ばっ　か、見てるな」と言われた、おいおい、と思った、そういう捉え方もあるんだと

部屋で集団の中にいるのが嫌だったので、外の切り株で、尾崎豊などを唄いながら座っていた、時に猫の大群が現れた時は気持ち悪かった、そして、朝の掃除もつい、忘れてさぼってしまった、「悠太さん、掃除だよ」と、よく言われた

食事の時間、箸の使い方が独特な人がいたので、19 歳のナースに、「気になるので、席を替えてもらえませんか？」と言った、替えてもらった

ある日は、切り株に座って、病棟の窓を眺めたら、19 歳のナースがこっちを見ていた、しばらくして、目を逸らしていた

ある日、病院を出て、近くの本屋に行った、俺はいつも、今まで、普通の本を読んでいたが、その時、初めて、哲学の本を選んでいる自分に気づいた、哲学というものさえ知らなかったが、ある日、父は「悠太は、そういう本、読むんだね」という表現で、気づかされた

父方のおじいちゃんが、危篤になったと連絡があった、1人のナースがタクシーを呼ぶから、この部屋で待つようにと言った、そこには、19 歳のナースもいたが、お互い黙っている、元々、俺は喋らなかったと思うが、おじいちゃんの危篤を前にして、喋るのは礼儀に欠ける行為だと思った、19 歳のナースは最後まで背中を向けていた、ナースは、俺をタクシーに乗せると運転手に場所を告げて、俺は病院に向かった、車中では寝た、おじいちゃんは、点滴をうっていた、間に合った！　あとは叔父が世話をしてくれた、おじいちゃんはそれから、亡くなり、後日、俺は、不格好な礼服で、葬式に出た、1人の男がずっと、俺のほうを見ていたが、気づかないフリをした

謝肉祭があった、俺は、つまらないフリをして、ずっと下を向いていた、それも苦しかったが、もう苦しいんだという姿を、担当の医者の先生に見せたかった、医者の先生は、後日、「辛かったんだね」と、俺に同情してくれた

俺の父は、毎週、必ず1回、仕事の合間を縫って、面談に来てくれた

母もたまに来て、兄も1回来てくれた、姉は立場上行けないことは、痛いほどわかった

父がビデオデッキを持って、大学のレポートの為の、映画を見よう、と言った時、黒人女性のレイプされる映像が流れた、俺は、まだ、若かったから、気まずくて息をするのが、しんどかった

マナが、食事の時間になると、食堂に向かって階段を上って歩いてくる、それを見つけると、俺は顔を背けて、部屋に戻るという、謎の態度をとるようになった

別に、マナが嫌いなわけでもないが、そうしてしまう

次の時もそう

次の時も…

マナが、少し寂しそうな顔をしている

…

だから、ある日、俺は、思い切って、マナが来てから、ずっと見つめてみた、マナは反応しなかったが、いつものように、食堂へ入っていった

そして、確か、もう１回は、やはり、俺は、また、無視をして、去った

本当は、３ヵ月いないといけない予定だった

しかし、この集団生活に、いよいよ俺も限界が来た

俺は、父に、昔、お世話になった、お寺に行くから、ここを出させて欲しいとお願いした

そうしたら、父と医者が話合い、早期退院が決まった

荷物などは、すべて父がやってくれたから

俺は、晴れて、埼玉の寺に行くことができた

しかし、俺は、やはり、寂しかった

実家が恋しくなった、無性に...

かいつまんで言うと、俺は、和尚さんと、父に、迷惑をかけたあげく、もう裸足のまんま、寺を出た

帰り道がわからないで、困っている俺を、駅員はルンペンを見るような目で、いなした

１人の優しい青年が助けてくれたが、その説明もよくわからなかった

俺は、電車で裸足だった

実家につくと、俺は裏からカギを開けて入り

「帰ってきちゃった〜」と言い、部屋に入った

皆、無言でしらけている、兄だけはいなかった

父、母、姉、そして、自分がいた

たぶん、母が鍋焼きうどん、を頼んだ

それを、無言で、皆で食べた、父がいたかは覚えていない

とにかく、無言だった

その後、俺は、隣の部屋でピアノを弾いた

勝手にある程度、一定の旋律を弾いた

暗く哀しい、調べであった

途中、

父と母が来て、とにかく、和尚さんに迷惑をかけたんだから、電話だけはして、謝りなさい、と言った

俺は、抵抗したが、

父が電話をしてくれて、最後に電話に出た

たぶん、俺は「すみませんでした」と謝ったと思う

和尚さんは、「また、来いよ！」と、言ってくれた

その後、年賀状を送ったが、理由はわからないが、返事は来なかった

和尚さんとの線も切れてしまった

また、俺は、せっかく、へその緒をちぎったのに、帰ってきてしまった

せっかく、実家は、平和になっていたのに

俺が帰ってくると...

俺は、長い間、閉鎖病棟にいたから

外が怖くなっていた

引きこもりながら

ちょっとずつ、外に出た

ただ、１点、やはり、実家にいるのが良くなかった

その後、父に習い、仕事もしていたと思う

同窓会まで、企画もして、行った

しかし、バラバラと崩れ落ちていく

孤独～声を亡くして～

ドシド、ドシド、レドシ、ソソラシラ、ファファミファ、ソレレ～

２度目の、精神病院への足音が、響いているのであった...

「完」